

## Ⅳ 相模湾に関する研究会

主催 相模湾海洋調査連絡会

参加 水産海洋研究会

水産海洋研究会は、才3回相模湾海洋調査連絡会に参加し、(実質的には共催)研究、討論に加わつた。話題提供が多く、活潑な質疑応答があり、予定時刻を大分超過し、19時過ぎ散会した。

主 題 相模湾に関する研究会

日 時 昭和39年12月3日 13.00~17.00

場 所 東海区水産研究所 才2会議室

参加者 約 35名

コンビーナー 平野 敏行

話題および話題提供者

- |                                      |                |
|--------------------------------------|----------------|
| 1. 東京湾南部の観測経過について                    | 花 戸 忠 夫(千葉水試)  |
| 2. 相模湾の海況について                        | 上 原 進(東海水研)    |
| 3. 伊東の観測塔について                        | 菱 田 耕 造(気象研)   |
| 4. 江の島付近の海況                          | 吉 田 昭 三(水路部)   |
| 5. 淡青丸による相模湾のプランクトン調査の概要             | 丸 茂 隆 三(東大海洋研) |
| 6. 相模湾における海洋微生物の生態学的調査概要             | 多 賀 信 夫(東大海洋研) |
| 7. 関東近海のサバけね釣漁業<br>(マサバの集合の研究を中心として) | 宇佐美 修 造(東海水研)  |

### 1 東京湾南部海域の海況(経過報告)

花 戸 忠 夫 (千葉水試)

#### (1) ま え が き

近年東京湾内の千葉県海面は京葉工業地帯の造成によつてノリ漁場が南に延び、富津崎を越えて安房郡富浦町に達するようになった。

これ等の新たに開発されたノリ漁場の水域が湾口より流入する外洋水の影響をかなり受けていることはすでに知られていることである。

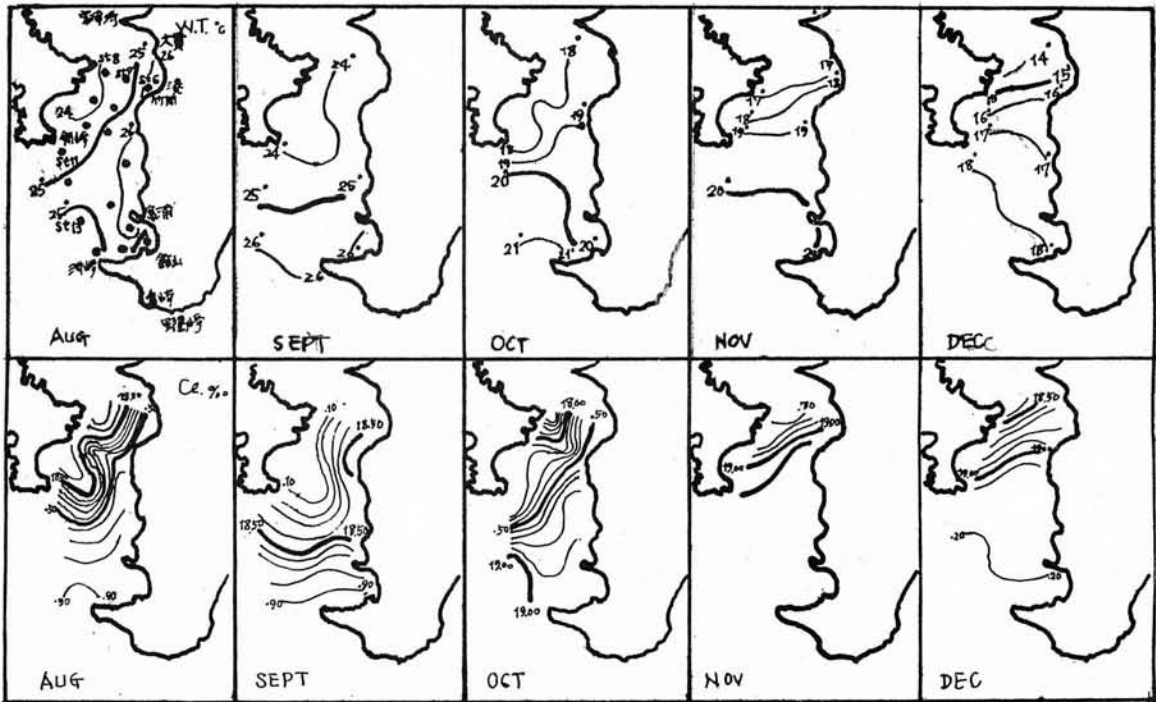
この年8月より、これ等ノリ漁場に対する海況の予報資料を得るため東京湾南部海域の調

査を実施しているのので、同年内における調査資料からその概要をここに報告する。

(2) 結 果

東京湾南部海域における湾水の流動にはおおむね千葉県側を北上し、神奈川県側を南下する定常流の存在が認められる。

8～12月にかけての調査結果でも20m以浅ではW.T.CIの分布で略々同様の傾向を見せ、千葉県海面に比し神奈川県側は低温、低かんである。この間における水温分布は9月から10月にかけてかなりの降温現象を見せたが、その後11月にかけてはほとんど変動を見せていない。CIでは9月湾内水の流出が卓越して全般に低かん水におおわれたが、11月以後外洋水の流入が顕著になり19.0‰以上の高い水塊が剣崎より天羽町湊を結ぶ線まで北上している。(オ1図)



オ1図 東京湾南部 om W.T. CI 分布図. 1964.

オ2図は東京湾口部と剣崎、観音崎及び天羽町湊地先の10m層のT-CI図である。

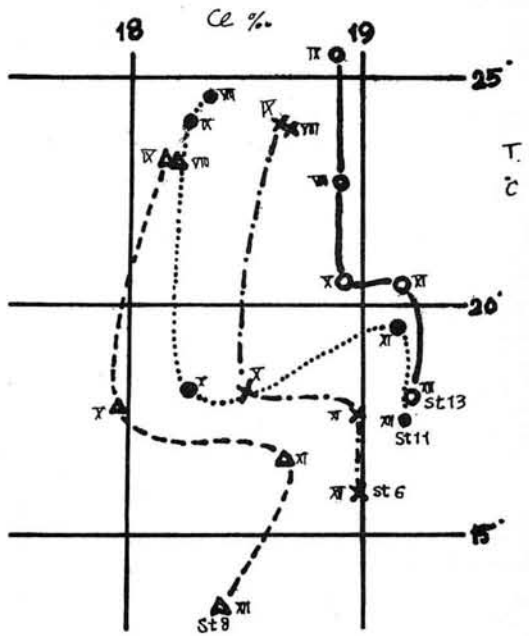
これを見ると8～12月を通じ湾口部は19.0‰を中心とする外洋水であり、観音崎沿岸は18.0‰を示す湾内水との混合域で、湊地先はこの両者の略々中間型の水質を示して

いる。ただ11月以後房総沿岸に黒潮流軸が接岸したためこの海域の水質もかなり変動し、湾口部で0.3‰、剣埼では1.0‰、観音崎で0.8‰、湊では0.5‰と夫々高かんとなり、これ等の海域が外洋水の影響を受けている事が判る。又これを各定地水温でも(オ3図)同じくその傾向は現われる。

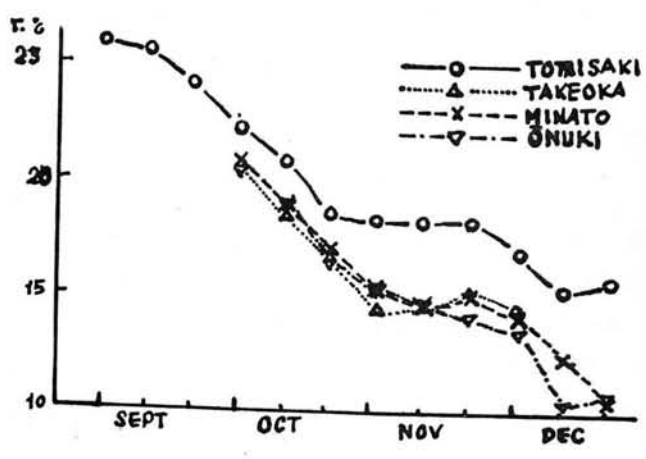
オ1表に湾奥の浦安から湾口にかけての10月の水質分析結果を示した。これで見ても観音崎を境とする湾内水域と南部海域ではかなりはつきりした差が認められる。

以上、39年8月~12月にかけての南部海域では9月から10月にかけてかなり目だつた低温低かん現象が見られたが11月には外洋水の流入によつて水温の低下は止まり処によつては昇温した処も見られると共に、Clでは19.0‰以上の外洋水が剣埼より天羽町湊を結ぶ海域をおうよるになつた。このような

湾内水域の水質の変化は外海の野島崎沖合を北上する黒潮流軸のふれ方と略々対応して起つているようである。



オ2図 T-Cl 分布 10m層  
(ローマ数字は月を示す)



オ3図 定置水温(旬平均)

	C. O. D ppm	Ammon- ia-N r/L	Nitrite- -N r/L	Nitrate -N r/L	Phosph ate-p r/L	Silicate -Si r/L
浦 安	1.82	560	23.8	211.2	68.2	3091
船 橋	1.28	501	23.8	54.9	63.7	479
谷 津	1.52	415	22.7	62.9	69.8	450
検 見 川	1.60	454	23.8	88.1	49.6	337
大 貫	0.81	238	16.0	42.6	20.2	393
st 7	0.40	104	13.4	46.1	14.0	tr
湊	0.73	82	11.0	26.1	tr	393
竹 岡	0.63	tr	7.0	15.4	tr	tr
st 13	0.44	tr	5.4	12.8	tr	tr

水質分析表( №1~4, 27日, №5~9, 29~30日 )

Oct, 1964

千葉内湾水試分析

## 2 相模湾の海況について

上 原 進 (東海水産)

私共が研究課題の一つとして、相模湾の調査を実施している理由には、

- i) 相模湾を含む、豆南、房総海域一帯が、サバ、カタクチイワシ等、重要魚種の産卵場であり、この海域の海況変動は、将来の水産資源につながる問題として重要な一側面をもっていること。
- ii) i)に関連した問題として昭和38年の冬春期、とくに鹿島灘沿岸に出現した極度の異常低温化が、房総沖を通じて、豆南海域、相模湾にどのように影響したのか。
- iii) 三浦半島西側にある小内湾、小田和湾のノリ場の環境研究(本研究会報 №5...平野)の中で、湾内水交換の問題と関連し、相模湾の海洋学的な性状を知ることが必要である。

その他、相模湾奥に存在するブリ定置漁場に関連しても生物環境を取り扱う立場から海況を考えてゆかねばならない。相模湾には多くのこのように問題を含んでいるので、モデル海域に選り調査研究をおこなっている。

私共がおこなっている調査の方法は、湾内に決めた観測線(観測地点、東京湾口を含め24地点、そのほか、昭和39年にはさらに湾外に5地点ふやした)を3回反復して観測し湾内の短期変動をみてゆくこと、そして、この変動の原因を、相模湾一豆南、房総海域一黒